

## 『ハムレット』

シェークスピア作

ポール・ステッピングス台本/演出

## あらすじ詳細

## 人物

ハムレット	デンマーク王子
クローディアス	デンマーク王、ハムレットの叔父
ハムレットの父の亡靈	
ガートルード	デンマーク王妃、ハムレットの母、今はクローディアスの妻
ボローニアス	宰相
レイアーティーズ	ボローニアスの息子
オフィーリア	ボローニアスの娘
ホレイショ	ハムレットの親友
ローゼンクランツ	ハムレットのかつての学友
ギルデンスター	ハムレットのかつての学友
マーセラス	衛兵
バーナードー	衛兵
フランシスコ	衛兵

デンマークの王子ハムレットは父王が変死し、その2ヶ月後に王妃の母ガートルードが父王の弟クローディアスと再婚したので、やり場のない憂鬱に悩まされている。王と王妃はハムレットが「黒い霧」に閉ざされていて二人に心を聞きとしないので「自然の規律」を説き、うちとける様に懇願する。王子は「血のつながりは濃くなつたが、心のつながりは薄まつた。」と駄洒落で答へ、素っ気無い。

宰相ボローニアスは口数が多く、常識をまくし立てる老人。息子レイアーティーズがフランスに行くにあたりお決まりの忠告をする。またレイアーティーズは妹オフィーリアにハムレットとの恋について、あまり眞面目にとらない様だと妹を気遣う。

ある晩、父王にそっくりの亡靈から叔父クローディアスの謀略により毒殺されたと告げられる。亡靈は「復讐せよ、然しが汚すな。」と至難の業ともいえる命題を課す。王子は親友のホレイショによる秘密を他言しないと誓わせる。驚き恐れるホレイショに王子はこの世には人智では計りしれないことがあるだと諦める。

復讐の念を固めた王子は惱み苦しみながらも、狂人を装い、道化となることによりクローディアスや自分をとりまく全ての人間の真実を確かめようとする。「狂人」という隠れ名で身を包んだ王子が、次々と故父辛辣な諧謔の矢の数々、それは見事に相手の急所を貰く。クローディアスは王子の奇行の原因を探ろうと、かつての学友ローゼンクランツとギルデンスターを城に招き、ハムレットの眞実を探らせようと謀るが、ハムレットは叔父の策略を察知し、この二人から叔父の本意を白状させてしまう。

一方、宰相ボローニアスはハムレットの狂気の原因是娘のオフィーリアへの恋だと王に忠告し、それを確かめようと王と二人で物陰に潜み、ハムレットとオフィーリアの出会いの瞬間を盗み聞きする。ハムレットは恋人に「尼寺に行け」といい、女性にいたさる不思議を彼女にあたりちらす。純直で美しい恋人オフィーリアは王子の突然の変貌に戸惑い、嘆くのみ。一方、クローディアスには甥の「狂気」は他に原因があると疑う。

王子は、折しも訪れた旅役たちに、毒殺のくだりを王と宮廷人の面前で演じさせ、亡靈の言葉の眞実を確かめようとする。親友のホレイショにも王の様子をつぶさに観察する様に頼む。毒殺の段で、王は蒼白になり立ち上がる。遂に、芝居が罪を暴く「罠」となったことに王子は小躍りする。

自分の罪が「悪臭」をはなっていることを意識したクローディアスは独り祭壇の前で祈るが、罪によって得たもの「王冠、野心、王妃」を手放せない以上、「もちろんかかった鳥のように」あがいている自分の懲悔のむなしさを感じている。そこに来たハムレットは叔父を刺す絶好の機会だが、祈る者は殺された後に天国にいくことになるので、ここでは叔父を刺さずに「奴が救いのない悪業に耽っているとき」を待つことにする。

息子の度を超した「悪ふざけ」を不審に思った母と対決するに至ったハムレットは容赦なく母を刺傷し、その場に隠れていた恋人の父、宰相ボローニアスを叔父と思って刺してしまう。そこへ父王の亡靈が現れ、母の「闘う魂に手を貸す」様に告げる。遂にガートルードに「お前は私の心を真二つに裂いてしまった」と言わせる。最後に自分の狂気は偽りであること、それを叔父に漏らさない約束をさせる。

ボローニアスの死を知り不安に駆られたクローディアスはこの「俺の血の中で荒れ狂う熱病」のごとき病を英国に放逐することにする。英國に着き次第、殺害する旨を記した英國王への国書を託し、ローゼンクランツとギルデンスターの二人に伴わせてハムレットを英國へと出国させる。一方ボローニアスの死とハムレットに見捨てられることは重なりオフィーリアは気が狂ってしまう。兄のレイアーティーズがフランスより帰国。父ボローニアスの死と隠密の葬儀を知り、最畢を伴い王に復讐を迫って押し寄せて来る。狂った妹を目の前にし、怒り狂うレイアーティーズに王はハムレットが下手だと明かし、自分もボローニアスの死を嘆いでいること、ハムレットこそ共通の敵だと怒れる若者に告げる。

ハムレットは嵐にあり、海賊船に助けられ、身ひとつで祖国に舞い戻ってくる。実は王の策略を出しぬき、国書をローゼンクランツとギルデンスターが殺害される旨、書き替えたのだった。王子は愉快そうに墓穴を掘る人夫に出会い、暫しの憩いを得る。偉大なシーザーも今となっては酒樽の栓でしかない。たまたまヨーリックという昔の道化の骸骨を手にした王子は感激に陥る。そこで、溺死したオフィーリアの弔いの一行がくる。妹の亡骸をもう一度抱こうとし、ハムレットを睨うレイアーティーズを見た王子は全てを忘れ、自分も墓穴に飛び込み、妹を抱き合ひとなるが王が留める。

王はレイアーティーズとハムレットに決闘をさせることに決め、レイアーティーズと謀り、刺しに毒を塗ること、また酒杯にも毒を盛ることにする。決闘が始まる前に王妃はボローニアスを殺したのは「狂気」のなせる業だったと許しを乞う。二人は「兄弟」として闘う事に決める。決闘の途中、皇子ハムレットの勝利を願って王妃は毒の入った酒杯をそれと知らずに飲んでしまう。レイアーティーズはハムレットを毒の剣で刺すが、もみあつた後、二人の剣がとり替わり、自分も毒刃に倒れる。毒が体内を駆けめぐり、王妃が倒れる。レイアーティーズが王の隙を王子に告げる。ハムレットは叔父を刺し、「母上の後を追え」と言い毒杯を飲ませる。こうして、父のためには果たせなかつた復讐が、母のために、果たされたことになる。ホレイショが残った毒杯を口に含めていこうとするが、ハムレットはその杯を取り上げる。「杯をよこせ。ああホレイショ、...自分がすんできた、舌も止まつた。さらば、後は沈黙。」と言い、息絶える。

(作成: 渡辺三千代 アシュリーアソシエイツ)

<前のページへ>



« シアター&プロダクションページへ戻る